

北海道富川高等学校

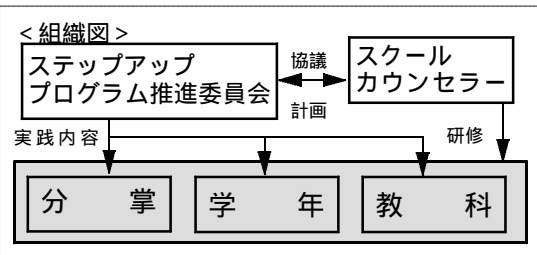
課程 全 日 制
 学 科 普通科・商業科
 生徒数 1 1 7 名

1 取組の特徴

本校は、生徒にピア・サポート活動を広めることにより、生徒のコミュニケーションスキルの向上や生徒同士が互いに支えあう関係づくりの育成を図っている。今年度は、教員研修を8回行い、生徒のコミュニケーション能力に係る課題について理解を深め、実効性あるトレーニングプログラムの検討・実践に努めた。

2 取組のねらい

- 1 全校生徒に対してコミュニケーションスキルの育成を図り、望ましい人間関係形成能力を身に付けさせる。
- 2 教職員に対して生徒と同様なトレーニングを実施し、生徒理解の深化及び教育相談の実践力の向上を目指す。



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>4月・1年生を対象に宿泊研修施設で構成的グループエンカウンターを実施</p> <p>8月・スクールカウンセラーによる教員研修
(期待される今日的生徒指導について)</p> <p>9月・1年生を対象に子ども理解支援ツール「ほっと」を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スクールカウンセラーによる教員研修
(保護者理解について) <p>10月・スクールカウンセラーによる教員研修
(構成的グループエンカウンターの効果と実践方法について)</p> <p>11月・スクールカウンセラーによる教員研修
(ソーシャルスキルの展開と基礎について)</p> <p>12月・1年生を対象に子ども理解支援ツール「ほっと」を実施</p> | <p>1月・スクールカウンセラーによる教員研修
(調査結果の検証及びピア・サポートの効果と実際について)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校教員による希望生徒へのピア・サポート研修
(自己開示の手法について) <p>2月・スクールカウンセラーによる教員研修
(今年度の振り返りと課題の整理)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校教員による希望生徒へのピア・サポート研修
(ペアワークを用いたコミュニケーショントレーニングについて) ・スクールカウンセラーによる教員研修
(次年度プログラムについて) ・1年生を対象に子ども理解支援ツール「ほっと」を実施 <p>3月・スクールカウンセラーによる教員研修
(調査結果の検証と次年度改善点の検討)</p> |
|--|---|

4 取組の内容

- 1 スクールカウンセラーによる教員研修
 - (1) ねらい
コミュニケーションスキルの向上を図る様々なトレーニングの目的、効果及び実施方法等について理解を深める。
 - (2) 対象
全教職員
 - (3) 内容
ア 生徒及び保護者の気持ちや、現代の生徒の実態に応じた生徒指導の在り方について
イ コミュニケーションスキルの向上を図るトレーニングの効果及び評価について
ウ 本校生徒の実態に即した取組について(協議)
 - (4) 成果
ア 教職員が学校・生徒を取り巻く現代的な課題について共有する機会となった。
イ 実際のトレーニングを体験することで、生徒の目線で効果を体感することができ、トレーニングの意義について理解が深まった。

2 子ども理解支援ツール「ほっと」

(1) 対象 1年生34名

(2) 実施日 1回目：平成24年9月3日、2回目：平成24年12月18日

(3) 分析結果の概要

1回目の実施では、「社会的規範の遵守」や「仲間づくり」の項目で高い数値が見られた。その一方、「リーダーシップ」や「発言・説明」、男子の「学業」の項目で低い数値となった。

2回目の実施では、「挨拶や感謝」の項目について改善が見られた。しかし、男子の「学業」については、引き続き課題が見られた。

3 本校教員による希望生徒を対象としたピア・サポート研修

(1) ねらい

子ども理解支援ツール「ほっと」の結果を踏まえ、本校生徒の自己を表現することが苦手であるという傾向を改善するため、ピア・サポート活動を通して、生徒の自尊心を高めるとともに、他者への思いやりの心や支え合いの気持ちを育む。

(2) 対象

コミュニケーション能力を高めたい生徒（自主参加）

12名参加（1年生5名、2年生7名）

(3) 内容

本校教員が教員研修で得た知識をもとに参加生徒に対し、計画的・系統的にコミュニケーションスキルの向上を図るトレーニングを行う。（例：「サイコロトーク」（自己開示と他者理解）「あなたはどっち?」（自己開示）「一方通行と相互通行のコミュニケーション」（コミュニケーションスキル）など）

(4) 参加生徒の感想

ア コミュニケーションに係るトレーニングを通じて、人との接し方について考え直すきっかけとなった。

イ 「どうせやっても何も変わらない」という気持ちで参加したが、これからも参加していくことで人と話すことがうまくなっていきそうだと感じた。



【アイスブレイクの様子】



【「一方通行と相互通行のコミュニケーション」の様子】

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

教員研修で得た生徒理解の知識を活用し、学び直しによる基礎学力の補充や定期的な個別面談を実施したことにより、生徒が抱える問題を早期に把握し対応することができた。中途退学者数及び不登校生徒数は、今年度0名である。

	H22	H23	H24
中途退学者数	5	7	0
不登校生徒数	0	0	0

表1 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

(2) 保健室の利用状況

前年度と比較すると、保健室の利用者数は約2割減少している。特に1年生の利用者数は7割以上減少しており、これまで多かった人間関係での悩みの相談による来室が減っている。（1年生の利用者数：H23 294名 H24 75名）

	H22	H23	H24
保健室の利用者数	589	705	541

表2 保健室利用者数の推移

(3) 生徒及び教員の変容

生徒は、学校教育全体で行われるキャリア教育を通して、コミュニケーション能力の必要性を認識し、ピアサポート研修へ意欲的に参加するようになった。

教員は、ソーシャルスキルなどの研修を通して、生徒の目線で生徒の感情を感じるとともに、授業保護者会及び生徒向け研修会などで、研修から得た生徒理解や保護者対応の手法を積極的に実践した

2 課題

(1) 本校は3年間クラス替えがないため、子ども理解支援ツール「ほっと」の結果を有効に活用し、生徒個々の特性と人間関係について定期的に考察する必要がある。

(2) 生徒同士が支え合う校風を醸成するため、生徒向けピア・サポート研修を充実させ、主体的にピア・サポートトレーニングに取り組む生徒を育成する必要がある。

3 次年度に向けて

(1) 子ども理解支援ツール「ほっと」の活用に関する教員研修を充実させ、教職員の理解を図るとともに、実施対象学年を拡充し生徒理解の充実を図る。

(2) 生徒向けピア・サポート研修を生徒に周知するとともに、教育課程に位置付け、計画的・系統的な実践を行う。